
元天才道士が妖怪ハーレムを完成させた！？

佐倉風弦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

元天才道士が妖怪ハーレムを完成させた!?

【Nコード】

N6543X

【作者名】

佐倉風弦

【あらすじ】

決して自慢じゃないが、天才道士と呼ばれた私はあと一步で夢見ていた大道士になれるところが、闇鴉という妖怪退治に向かったのだがその闇鴉に道士としての力を奪われてしまう。

力を失い、絶望した私に手を差し伸べたのはなぜか闇鴉だった。

彼の真意とは……。

飴をせびるアメ小僧、山の守り神と呼ばれる山神……兄の婚約者と名乗る猫荒らし……いつの間にか妖怪ハーレムが!?

いや、私は妖怪を退治する道士なんだが……!?!? あと、なぜか

勇者やエクソシストも妖怪退治に励んでる……。

第一夜

第一夜

淡い月の光だけが地上を照らし出す星の见えない夜だった。

木々がうつそうと生い茂り、草花が咲き誇る闇の濃い森のなかをひたすら走っていた。

全力で走り続け、もう一時間ぐらいになるだろうか。

私は息が苦しくならないようにと一定の感覚で息をする。

不規則に並ぶ邪魔な木々をうまくかわしながら、追っていた。

妖怪を――。

私が追い続けている妖怪は人の姿をしていてその背には大きな夜を連想させる漆黒の羽を生やしている。

闇鴉という、不吉を呼ぶ妖怪だ。その姿は優しそうな青年ではあるが、近づいた者に闇の風を浴びせ相手の最も優れている力をたちまち奪ってしまう。

最も優れている能力……例えば画家なら絵を描く能力……道士なら妖怪を払うための力……。

追っても一向に追いつける気配がない。

「早い……」

ここまで退治に時間がかかるのは初めてのことであり、私は固唾を呑んだ。

なぜこんなに早いんだ？ 妖怪に追いつくまでここまで時間がかかることなんてなかった。

流石に息が上がってきて足はだるくなり、休みたいと思ったがそれはできない。コイツさえ倒してしまえばあれだけ夢見た大道士になれるんだ。

あと、一匹なんだ——。逃がすわけにはいかない。

「止まれ、闇鴉！」

私は足を止めていつも愛用している銀色の金の装飾が施された銃を構え、大声を張り上げた。

この銃は私の力を注ぎ込んだものでこの銃による攻撃を受けた妖怪は消滅する。

意外にもあっさりと闇鴉は足を止め、こちらに振り向くとまるで嬉しいことでもあったかのようににこりと微笑んだ。

「何かな」

緊張感のない声を闇鴉は夜風に溶け込ませる。

何なんだ、コイツは……？

私は思わず眉をひそめるが迷わず引き金を引いた。

その瞬間、闇鴉がぱつと大きな羽を広げ、空高く舞い上がる。

「外した……」

そう呟いた時、闇鴉が目にも見えないような速さで舞い降りて大きな風を巻き起こす。

「……！」

その風を浴びた瞬間、ぞくりと悪寒が走った。何とも言えない恐怖なのか何なのか分からないものが

身体の内から這い上がってくるような感覚に囚われた。

それを振り払うように銃の引き金を引き、白い光がまっすぐ綺麗な軌跡を描きながら闇鴉の胸に命中する。

「え……?」

私は思わず声を漏らし、冷や汗を流した。

確かに命中したはずなのに、闇鴉は消滅することなく目の前に何事もなかったかのように存在しているのだ。

「どうなって……」

「知らなかったかな? 僕の力」

闇鴉は心底楽しそうに笑い、手をくるくる回している。

ゆっくりと思い出す。闇鴉の力は――相手の力を奪うこと。

つまり、私は力を奪われたのだ。

これでは憧れの大道士にもなれないし、妖怪が払えないなら道士でいられるかどうかすら分からない。

夢が壊されていく。心のなかで夢見て積み上げられてきたものが音もなく崩れていくような不気味な感覚を感じる。

「嘘だろう……? お前のせいで……私は道士じゃいられなくなる……! どうしてくれるんだ!」

妖怪に人の心が理解できないのは分かってはいたが私はそう言っ
てその場に膝をつき、うなだれた。

闇鴉はしばらくキョトンとしていた。

やがて……。

「助けて、あげようか?」

第二夜

「助けて、あげようか？」

「は……？」

闇鴉の言葉にどう反応して良いのか分からず、ただ固まるしかなかった。

コイツ、何を言ってるんだ？ 意味が分からない。私の力を奪って置いて何でこうなるんだ？

しばらく沈黙が続き木々の葉や草が風で揺れる音のみが聞こえた。

「だから、君の妖怪退治、手伝ってあげようか？ ほら、君にはもう妖怪を倒せないけど、僕には倒せるからね」

闇鴉は地面の草をむしってピリピリ破きながらにこやかに告げた。だが、妖怪を退治する道士としては……。

「力を返せ」

こんな妖怪なんか頼ってたまるか。そう思い、言ったのだが……。

闇鴉は困ったように苦笑いをする。

「そうしたいけど、一度吸い取った力は元に戻せないんだよね」
「な……」

じゃあ、まさか……コイツに頼るしか方法が残ってないのか？

「何が目的なんだ」

「退治されちゃうの嫌だからさ、君の手助けして免れたいわけだよ」

そう言うこと、なのか？ 何かが違う気がする。闇鴉は確か、妖怪のなかでも結構強い力を持っていたはずだ。そんなのが退治されるのが恐いなんてあり得ないと思うが……何か他の理由を隠してるんだろうか？

「ねーねー、どうする？ このまま道士やめちゃう？ それとも……僕に頼ってでも続ける？」

闇鴉は愉快そうに尋ねてくる。

頼って、と言われると改めて自分の力がなくなったことを実感し、敗北感がこみ上げてくる。

私は不愉快極まりなかったが、答えは一つしかなかった。

「分かった」

私は、闇鴉の申し出を受けた――。

神社に戻ると、誰もいなかった。

私の部屋は木製の簡素な造りだが、どういうわけか父や姉が買っていた絨毯や家具やらでピンク色に染まりつつある。このままだと神社の一室とは思えない状態になりそうな勢いだ。ピンク色のちゃぶ台の前の座布団に座り、茶飲みでお茶をすすっていた。

闇鴉は、楽しそうに部屋の中を探索している。ふわふわ浮いてるのが鬱陶しい。

「わー、すごいねー。あ、そう言えば、君の名前は？」

せんぐじょうせんら
「千求道千羅」

「千羅ちゃんかー。変わった名前だねー」

私は、さっと闇鴉から顔を背けた。

「私は……お前のことを良く思ったわけじゃない。道士でいるため、仕方なくだ」

「はいはい。ねーねー、この部屋可愛いねー。何か、ピンクと白ばかりでお花畑にいるみたいだよー」

闇鴉は、妖怪とは思えないほど無邪気な笑顔で語る。

コイツ、本当にあの闇鴉なのか？

「……それにしても、どう説明するべきか」

姉上には、言わなければ……妖怪の力を借りるなんて、やはり怒るだろうか……？

私は沈んだ気分のため息をついた。

白とピンクで彩られた部屋には、開け放たれた窓から夜風が入ってきていた。

「ねーねー、千羅ちゃんのお姉さんってどんな人？ すっごく気になるな」

にここにこしながら闇鴉はそう聞いてきた。
宙にふわふわ浮いてるのが気になって仕方ない。何だろう……？
目がチカチカするような、そうでもないような？

「闇鴉、お前……浮くな」

「えゝなんで？」

不思議そうに首を傾げる闇鴉。

「目がおかしくなるだろバカ」

「そうなの？」

闇鴉はふっと足を床につけた。

私は窓から外の様子を眺める。

外は、真っ暗で遠くに複数の明かりが見える。恐らくは民家だろう。
う。

それにしても、まだ姉上の姿は見えない。

もう帰って来てもいい頃だが……。

そう思いつつ目を凝らしたが人影は全くと言っていいほど見えなかった。

「どうしたのー？何見てるの？」

闇鴉が気になるといった様子で窓を見る。

「何でもいいだろ」

私は窓から離れ、布団に座った。

布団の脇に置いてある目覚まし時計を手に取り、時刻を確認する。
時計は十時を指していた。

「そうしていると睡魔が襲ってきて目をこすった。

「もう、寝るか……べつに、明日でもいいよな、うん」

「ただいまー」

「あ」

玄関から聞こえた声に私は思わず声を漏らした。

「あ、もしかしてお姉さん？」

「……行くか」

眠い目をこすりつつ、渋々立ち上がる。

姉の天羅^{てんら}は私と違って美人だったり……。黄金色の髪をおさげに
していて神々しい巫女服を身に纏っていて……。それに比べて私は、
青緑の短い髪に袴……。お世辞にも美人とは言えない。髪の色に関
しては母の遺伝で、天羅は父の遺伝なので文句を言うつもりはない。
闇鴉に力を借りるということを天羅に話すと、彼女は笑顔で頷く。

「そうなの？ いいんじゃないかな？」

「え……？」

あっさりな反応で、正直驚いた。目を丸くして固まってしまった
のは言うまでもない。

「だって、大道士になるのは、千羅の夢でしょ？そのためなら、ど

んな方法を使ってもいいよ」

「あー……そうだな、ありがとう」

とりあえず笑ってみた。……失敗してにやり、という感じになつてないことを祈った。天羅と闇鴉の反応を見る限り失敗はしていないようで安心した。

「頑張ってね。闇鴉さんもよろしくね」

天羅は、そう言って闇鴉にも笑いかける。

「よろしく」

「……」

しかし、こんなもので大道士になれるだろうか……？　よく考えれば、道士としての力がない今、本当なら私はもう道士じゃない……。

第三夜

太陽がギラギラ照りつけるなか、薄暗い森の中を散歩していた。後ろからは、闇鴉がふわふわと宙に浮いてついて来ているが、できるかぎり振り返らないようにしていた。

木々が生い茂り、草花が咲き誇り、森の中は緑ばかりの良い景色だ。

妖怪退治の際に訪れる時は、こうしてゆっくり景色を堪能することもできない。

「……」

しばらく黙って歩いていると、ついに闇鴉が話しかけてきた。

「ねーねー、千羅ちゃん、見てよ。あの木、樹液がすごくおいしそうだよ」

「……」

私が返事をしなくても、闇鴉は上機嫌に話を続ける。

「あ、あと、あの花も甘そうだよねー。他には、草とかも意外とおいしそうかな、キノコもおいしそうだよね」

「……」

コイツは、森を食べ物宝库としか見てないのか。

ちよつと森の素晴らしさ（もちろん食用ではなく）について語ってやりたいと思ったが、堪えた。

とりあえず、闇鴉の語る森の素晴らしさ（食用として）については何も返事をせず、さくさく歩き続けた。森を食用として見るなんて私は認めない。

「ねーねー、千羅ちゃん」

「……」

「何か話そうよ」

「……」

返事もせずにいると、闇鴉が突然足を引っ掛けてきた。
盛大にすっ転んだ。

「何するんだよ!」

「だって、千羅ちゃん返事してくれないからさ」

闇鴉は、にこにこ笑う。

コイツ……コイツに雷落ちればいいのに……。

すぐに立ち上がり、さくさく歩き出す。

「ねーねー、千羅ちゃん」

「うるさいバカ」

ふと、足元を見ると巨大な足跡があった。森のなかの動物とは到底思えないほどの巨大な足跡……。

「これは……」

「熊さんじゃないよねー…この大きさは、あの人かな」

闇鴉が呟く。その言葉に首を傾げた。

「あの人?」

「森喰い獅子って妖怪、知ってる?」

「いや……」

私は首を振った。

道士と言えど、全ての妖怪を知っているわけではない。

妖怪は数え切れないほどいてまだ誰も見たことがなく、知られていない妖怪もかなりいるだろう。

「森喰い獅子さんはね、その名の通り森を食べる妖怪なんだよ、大きな獅子でね、見た目はすごく怖いよ」

闇鴉は笑顔で語り続ける。妖怪の間でも一応人間と同じように交流はあるらしいから、闇鴉はその森喰い獅子と知り合いなんだろうか？

「でも、森喰い獅子さんは、森の中のものしか食べられない。つまり、森を出てしまうと何も食べられないんだよ。森のなかなら、たとえどんなものでも食べられるけどね。あ、これね、現在森のなかにいる人も含まれちゃうからね」

思わず難しい表情をした。

つまり、今森のなかにいる私も含まれると言うことだ。恐らくは、闇鴉も……。

妖怪がいると聞いて黙っているわけにはいかない。

「探すか」

私は、ポケットから札の巻きついた銀の銃を取り出した。

「あれー？千羅ちゃん、何で銃にお札なんか巻いてるの？」

不思議そうに尋ねてくる闇鴉に対し、淡々と答えた。

「この札を武器に巻いて、呪文を唱えれば、力がなくても道術を扱える。と言っても、傷を負わせるだけで、妖怪を消滅させることはできないけどな」

「そうなんだー。トドメは僕に任せてねー」

嬉しそうに言う闇鴉に対し、黙って頷いた。

不本意だが、コイツに頼るしかない。それ以外に妖怪を退治できる方法がない。

その時、目の前の茂みが揺れる。巨大な獅子が現れた。

金色の毛に真っ赤な大きな目……背には、黒い羽が生えていた。恐らく森喰い獅子だろう。

「道士カ、イマワシイ……」

森喰い獅子は低い声を発した。こっちも忌まわしいぞ。

私は銃を構える。

その反面、闇鴉はにこにこしているだけで何も動きはない。

「我ノ、邪魔ヲスルナ。二度ト、邪魔ナドデキヌヨウニ、喰ってヤル！」

森喰い獅子は、大きな咆哮を上げる。地面が揺れ、葉がさがさと音を立て、びりびりと振動が空気に乗って伝わってくる。

「イマワシイ、イマワシイ……」

森喰い獅子は大きな羽をはばたかせ、鋭い牙をむき出しにして飛びついてくる。

さっとかわし、木の後ろに身を潜めた。

「ドコダ…」

森喰い獅子が、目をギョロギョロさせながら周囲を見回している。私は、それを一瞥し呪文を唱える。

「天の陣、地の陣、応えよ、今、この時、悪しき妖怪、力を求める者、どちらも揃う、その偉大なる力を我に与えたまえ」

銀に銃口を森喰い獅子に向ける。

幸い、まだ気づいていないようだ。

「退！」

銃の引き金を引いた。

大きな銃声が森に響き渡る。

銃からは煌めく白い光線のようなものが放たれ、森喰い獅子の身体を貫く。

「グルル…人間メ…人間ゴトキガ、我ニ傷ヲ負ワセルナド…」

森喰い獅子は傷口を舐め次の瞬間、こちらに勢い良く疾走してきて突進してくる勢いだ。

「退！」

もう一度引き金を引き光線を放つ。

次は森喰い獅子の足に命中し、森喰い獅子は血反吐を吐きながらよろめく。

「貴様……許サン！！ガアアアア！！」

森喰い獅子は大きな咆哮を上げると、木々を喰い散らかしながら

こっちに向かってくる。

早い……。

「ガアア!!」

「く……!!」

回避が間に合わず、腕を鋭い牙で噛まれた。

激しい痛みが走る。

このままでは、食いちぎられそうだ。

私は空いている方の腕で銃弾を放った。

また大きな銃声が森のなかに響き渡る。

銃弾は、森喰い獅子の頭に命中した。

「グルアアアアアア!!」

森喰い獅子は、よろめきながら後退した。

「そろそろいいかな?」

先ほどまで空から愉快そうに見物していた闇鴉が舞い降りた。
相変わらず緊張感も何もなくにこにここと笑顔を浮かべている。

「さて、森喰い獅子さん。そろそろさよならしよつか?」

「貴様…闇鴉……妖怪ノお前がナゼ……」

「うーん、秘密」

闇鴉が、羽をはばたかせると、その姿を大きな鴉に変貌させる。

「ヤミ、カラス……」

闇鴉は、森喰い獅子を喰らった。
それはもう、無惨に。

「疲れちゃったな」

「お前：どっちが本当の姿なんだ？」

「こっちだよ、あっちは戦闘用ってところかな」
「なるほどな」

笑顔で答える闇鴉の言葉にとりあえず納得した。

闇鴉、か……。普段はこんな奴だが、やっぱり恐ろしい妖怪には
変わりなさそうだ。

「ねーねー、晩ご飯なに？」

闇鴉は笑顔で質問を投げかけてくる。その笑顔は先程の戦いを忘れてしまいそうなほどのものだった。

「鴉の丸焼き」

そっけなく答えてやった。

第四夜

今日は、雨が降っていた。

ザーザーと音をたてて、空から水が降り注ぐ水が地面を濡らして濃い茶色に染めていく。

窓からボンヤリとその様子を眺めていた。

「わー、雨だねえ、千羅ちゃん」

背後から闇鴉が声をかけてくる。

「こんな日は……アメ小僧が出るかな？」

「アメ小僧？」

知らない名前だったので、思わず聞き返した。名前から察するに妖怪だろうか？

闇鴉は、にこにこ笑顔を浮かべる。

「アメ小僧は、雨の日に出て来て人に飴をもらおうとするんだよ。まあ、害はないからね」

「何だ、害はないのか」

私も、害のない妖怪まで退治するような奴ではない。

害がないなら、放っておこう。

まあ、どんな妖怪なのか気にならないと言えば嘘になってしまうが……。

こんな天気の日になんか外に出て確認するのも……。

「二人ともどうしたの？」

いつから部屋に入って来ていたのか、天羅が不思議そうに質問してきた。

天羅の質問に答えない義務はない。

「アメ小僧の話をしていて……」

「気になるの？」

「まあ、道士であるし、いろんな妖怪のことを知っておくべきだとは」

「じゃあ、探してきたらいいじゃない。気になるならね」

まあ、いろんな妖怪のことを知っておきたいということもありアメ小僧を探しに行くことにした。

傘をさして雨が降るなか、神社の周辺を歩いた。

とりあえずぐるりと周囲を回ったのだがアメ小僧は見つからず。じめじめした空気のなか、打ち付けるような雨が降り続け傘を差していても足元が濡れるのは免れない。早く帰りたいと思ったが、やっぱり妖怪が気になるわけで。

「千羅ちゃん必死でかーわいー」

「必死じゃない！」

とりあえず、慌てて言い返した。

そう、べつに必死じゃないんだ。そんなに見たいってわけでもないんだ、うん。

そうだ、妖怪なんかいつも見てるし、そんなに必死に探す必要はない。このままからかわれるのも嫌だし、戻るか……。

「あ、来たみたいだよ」

「え？」

闇鴉に言われ、振り向いて見ると小柄な少年が立っていた。ピンク色の髪に青色の袴。腰にはくまの絵がついた可愛い子袋。これが、アメ小僧か。

「飴ほしいなのー」

「えーと……」

「千羅ちゃん、餌付けだよ。飴、持ってきたでしょ？」

闇鴉に促され、ポケットから飴を取り出し、アメ小僧に手渡した。コイツは仮にも自分と同じ妖怪に餌付けなんかすることに違和感を覚えないんだろうか？

「ありがたいなの。一生ついて行くなの」

「は……？」

ついて来なくていいのに……。

「餌付け成功だね」

どんなに追い払おうとしてもアメ小僧はしがみついてきた。害を及ぼす妖怪ではないから祓うこともできない。というわけで……。

無駄な居候が増えた。

私は一応妖怪を退治する道士なんだが……どうしたんだ、これは……？

「おはようなの！」

「う……」

布団で気持ち良く眠っていたのに、腹に思い衝撃を感じた。
目を開けて見ると、目をキラキラさせているアメ小僧の姿があった。

「どけ、このガキ」

「ガキじゃないのー」

アメ小僧は、ほっぺをプクプク膨らませながらどいた。
私は起き上がると早々に布団を出た。

「おはよー。千羅ちゃん、よく眠れた〜？」

上機嫌に質問してくる闇鴉。仲間が増えて喜んでるんだろうか？
いや、元からこんな調子か。

「いや、まったく……」

妖怪二匹に囲まれた状態でまともに眠れるわけがない。
コイツら、別の部屋に隔離したいところだが、すぐに壁をすり抜けてこの部屋に戻ってくるものだから仕方ない。

軽くため息をついた。

まだ、問題が残っている。

コイツらを知り合いの道士にどう説明するか。

姉上は、納得してくれたがみんながそうだとは限らない。

「……」

「千羅タマ、早くアメちょーだいなの！」

アメ小僧が物ほしそうにこちらを見つめてくる。

小さな手を広げて飴をもらう準備を終えている。

「やればいいんだろ、やれば」

引き出しに入っていた飴をアメ小僧に手渡した。

アメ小僧は、ぱあっと笑顔になる。

「ありがとうなの！ 千羅タマ、とっても可愛いの！ 男にしか見えないなんてこれっぽっちも思ってたの！」

ケンカ売ってんのか。

ナイフを探したが、流石にこの部屋にはなく、諦めた。

「ねーねー、千羅ちゃん。散歩いかないのー？」

次は、闇鴉がにこにこしながら聞いてくる。

「……行けばいいんだろ、行けば」

「うんうん」

「ところで、アメ小僧は何で語尾になのをつけるんだ？」

「ママの名前がナノなの！」

「……母親の名前を語尾に持ってくるのは習性か何かか？」

「そうなの！ ママに名前があったらだけどなの！」

なのなの鬱陶しいのは黙っておこう……。習性なら仕方がない。しかし——名前か……。妖怪には、名前があるものとなないものがある。名前がある妖怪は非常に少なく、名前があるものは強い力を持つ……。一つ、疑問だった。

妖怪に家族はいないはずだ。何もない所に突然生まれる。親がない故に大抵の妖怪には名前がない。

アメ小僧の母親とは、誰だ――？

第五夜

青と白のグラデーションが繰り広げられる空……眩しい太陽の光がじりじりと地面を焦がしてしまいそうなほど強く照りつける。

暑いこの時期は、やはり多少暑さを凌げる森のなかを散歩する。うっそうと生い茂り、日光を遮る薄暗い森は真夏の太陽を防ぐには絶好の場所だ。

「ねーねー。ほら、あの毒キノコ、とってもおいしそうだよ」

またしても、闇鴉が笑顔で森の素晴らしさ（食用として）について語っていた。

「ボクは飽しかいらないのー」

「葉っぱもおいしそうだよ」

「そんなにおいしそうだと思うなら、さっさと食って腹壊せ」

「千羅ちゃん、ひどいな」

いや、私は決してひどくはないと思う。ほら、森を食用としてしか見てないコイツの方がむしろひどいだろ？ てか浮いてないで歩けよ。理由を聞けばどうせ疲れないからというんだろが、歩いて疲れることを覚えた方がいいと……。

「千羅タマ。千羅タマは道士なの？」

「ああ……そうだが……」

アメ小僧は不思議そうに首をかしげてこちらを見る。

「道士なのに、僕達のこと祓おうとしないなんてすごく優しいなの

」

道士というのは、人に害を及ぼす妖怪を祓う存在だ。害を及ぼすというのは、人を襲うものが主でそれ以外の何も人に対して害を加えない妖怪は祓わないのが普通だ。

だが、道士のなかには勘違いをしている者も多い。とにかく妖怪を祓えばいいと思い、何もしていない妖怪までも祓ってしまう。このせいで力の弱い妖怪が数え切れないほど祓われてしまっている。

アメ小僧の様子から察するに、道士に追われて祓われそうになった経験があるようだ。でなければ、今みたいなセリフは口にしない。私はアメ小僧の頭を撫でてやる。

「まあ……私は、悪い妖怪しか祓わないからな。お前は保護しといてやるから安心しろ」

「千羅タマ、大好きなのー」

……妖怪に大好きって言われたのは初めてだ。

そもそも、今までは妖怪を探しに行くのは退治しに行く時しかなかったからこんな風にまともに話したことも、ましてや仲良くなっただこともない。

妖怪と仲良くなるのを悪いことだとは思わないが……。

ずっと害を及ぼす妖怪を退治することで頭がいっぱいだった。

早く大道士になりたいから、修行ばかりして妖怪と向き合ったことなんか一度も――。

「千羅ちゃん、どうしたの？」

「え？ あ、いや……何も……」

いつの間にか黙り込んでいたようで闇鴉が不思議そうに覗き込んできていた。

慌てて首を振り、歩き出す。

「千羅タマー、お腹すいたなのー」

「僕もすいたな〜」

「雑草でも食ってろ」

とりあえず、家に妖怪が増えすぎないように注意しよう。

まさか道士の家が妖怪屋敷になったりなんかしたら大変なことになる。

第六夜

「眠い……」

朝、何とか起きたものの、眠くて目をこすった。
台所の調理台で包丁を持ちながらボーっとしていた。

「千羅ちゃん、おーい！」

いきなり声をかけられ、慌てて振り向いた。
そこには、にこにこ笑顔を浮かべる闇鴉が立っていた。

「な、何だ？」

「包丁持ったまま、ボーっとしてたら危ないよー？」
「分かってる……ほら、もうできたし、勝手に食ってろ」

私は、包丁を置いて言った。

「わーい、おいしそうだね」

「ご飯できたの？食べていいの？」

いつからいたのか、隣に立っていたアメ小僧がそわそわした様子
で質問してきた。

眠くて、喋るのが煩わしかったので黙って頷いた。

「わー、うれしいなの」

アメ小僧は、早速食べ始める。
妖怪も人間と同じ食べ物を食べられるらしいことは、最近知った。

まあ、妖怪を退治するだけでは知らないままのこともあると言うことだ。

「ところで、天羅さんはどうしたの？」

「姉上は、忙しいからな。大体、私達が起きる前にここを出てる」

「そうなんだね。大変そうだね」

「ああ……」

返事をする、台所から出た。

とりあえず、まだ眠い目を覚ますために散歩をすることにした。

まだ朝早いので、外は涼しくちょうど良かった。

いつもの森のなかを歩く。

今日は、闇鴉を置いてきたからいつもの森のすばらしさ（食用として）は聞こえてこない。

不意に、木々の葉が揺れたかと思うと、目の前に白い羽を背の生やした青年がいた。

恐らくは、妖怪だろう。

「千羅殿…可哀想に……」

ソイツは、笑いながら告げる。

「力をなくした、哀れな道士……」

背に白い羽を生やした妖怪は、笑いながらそう告げた。
森の草花が風で揺れる。

いきなり、出て来て失礼な妖怪だ。

コイツは、何の妖怪だ？見たことはない。

「お前……」

「私は、風白鳥……お会いできて光栄、千羅殿」

「……」

私は、懷から銃を取り出した。

それを風白鳥に向ける。

風白鳥は、愉快そうに笑う。

どうしても、その愉快そうな笑いが不愉快だった。

「おもしろい……」

「何がおかしい？」

流石にしびれをきらして聞いた。

「千羅殿…あなたは、私に傷を負わせることはできても払うことはできない。頼りの闇鴉は、どうした？」

「置いて来た」

「なるほど…ところで、知ってるだろうか…私も、闇鴉と同じく人の力を奪うことができる。ただ、方法が違う。私は、人を喰らってその力を手に入れる。あと、何の力を持っていない人を喰らっても、強くなる」

人を喰らえば喰らうほど、強くなっていくと言うことか。

これは、危険だ。

野放しにはしておけない。

銃の引き金に手をかけ、

「退！」

引き金を引いた。

白い光を纏った銃弾が発射された。

風白鳥は、高く飛び上がり、銃弾は木に命中する。

「この……」

すぐに、銃を上に向けた。

「退！」

銃弾は、風白鳥の腕に命中した。

風白鳥は木に飛び乗り、腕に手をかざす。
すると、みるみる傷が癒えていった。

「厄介な……」

払うことはできず、傷を負わせることしかできない私にとっては、
非常に相手が悪い。

「さて、こちらからも……」

風白鳥は、愉快そうな表情で呟くと木から、飛び降りた。

そして、大きな風を巻き起こす。

「……っ！ー！」

その風に、身体を切り裂かれる。

「くう……」

気が遠くなるほど痛い。

これが、ピンチと言うやつか。

立っているのがやっとだった。流石に闇鴉を連れて来なかったことを後悔した。

「さて…」

「!!」

風白鳥に髪の毛を掴まれた。

喰われる……。

そう思い、ぎゅっと目を閉じた時だ。

「はいはい、ストップ。そこまでだよ」

いつの間にか、闇鴉がいた。

闇鴉は、相変わらずにここにこしていた。

「闇鴉…」

風白鳥は、闇鴉に歩み寄る。

「久しぶりか：知らない間に道士の元にいるとは」

風白鳥が真剣な表情で言うが、闇鴉は相変わらずにここにこして、

「だって、退治されちゃうのいやだからね」

「つまり、私とは敵同士ということか」

「うん、そうなるね」

「……」

私は、銃を構え、引き金を引いた。

「おっと」

風白鳥は、すんなりと避けた。

「まだ、そんな力が残っていたか」

「ああ…それなりに、鍛えてるからな」

「はいはい、千羅ちゃん、もういいよ。無理してたら死んじゃうよ」

「そんなこと、言われても…」

「トドメを刺すのは僕だよ？」

「……」

確かに、私は妖怪を倒すことはできない。

「分かった…」

私は、頷くと渋々下がった。

「じゃあ、風白鳥。僕と勝負する？」

闇鴉が笑顔で問いかける。

「いや、やめておこう」

そう言い、風白鳥は高く飛び上がり、どこかへ行ってしまう。
それにより、巻き起こった風で木々の葉や草花が揺れる。

「おい、アイツを逃がしたら…」

「大丈夫だよ。今日は、もう帰ろう。そんなんで、死んじやっても知らないよ？」

$$\left[\begin{array}{c} \vdots \\ \vdots \\ \vdots \\ \vdots \\ \vdots \end{array} \right]$$

仕方なく頷いた。

結局、私は神社に帰ってきた。

玄関で、アメ小僧が出迎えてくれた。

「おかえりなのーって、たたった大変なのー！ー！ー！ー！ー！」

アメ小僧は、私を見るなり青ざめて騒ぎ出した。

あまりにもうるさいので、軽く頭をこづいてやった。

「落ち着け、騒ぐなバカ」

「でも、千羅すごいことになってるなのー…」

「大丈夫だ。これぐらい、慣れてる」

アメ小僧が心配しているのは、私の傷のことだろう。

まあ、これだけ傷だらけなら、普通の反応なんだろうが。

「でもー！」

まだ心配そうにしているアメ小僧に対し、

「構うな」

「うー」

「千羅ちゃん、僕が治してあげようか？」

闇鴉は、笑顔で言う。

「治せるなら、何でさっき治さなかった」

「忘れてたんだよ」

「……」

ため息をついた。

コイツのことだから、仕方ないか。

とりあえず、靴を脱いで上がると、台所の椅子に腰掛けた。
多分、怒った顔してるんだろうな。

自分でもなんとなく分かる。

「さっさと治せ」

「はいはい」

闇鴉は、やれやれといった表情で返事をした。

奴が手をかざすと弱い風が巻き起こり、一瞬にして傷が跡形もなく消え去った。

「これは……」

「すごいでしょー？」

嬉しそうに闇鴉は言った。

「…そうだな」

それにしても、風白鳥か。

あれは、早く倒さないとまずい気がする。

第八夜

ジリリリリリ！！

目覚まし時計の音が部屋中にうるさくなる響いた。
目覚まし時計を止めると布団に再び潜った。

「おはよう、千羅ちゃん」

「おはよーなのー！ー！ー！ー！ー！！」

闇鴉とアメ小僧がそう言う。

人の枕元で。

私は、渋々起き上がった。

「朝から、うるさいな」

「千羅ちゃんが起きるの遅いからだよ」

「うるさい」

私は、布団から出ると無言で台所に赴いた。

「おはようなのですよ」

「日鞠！？」

思わず、驚いた。

当たり前のように人の家に上がりこんで、朝ごはんを作っている
日鞠。ちなみに同じ道士仲間だったりする。

何でいるんだ？

まあ、聞いたところで……。

「何でいるんだ？」

「自然現象なのですよ？」

こんなものだ。

「それにしても、千羅も女の子らしい格好したらどうなのですか？」
「知るか」

私はさっと顔を背けた。

日鞠は、朝ご飯の支度に戻る。

「千羅ちゃんの女の子らしい格好か、僕も見てみたいな」

いつの間にか、隣にいた闇鴉が笑顔で言う。

「どっから沸いた？」

「ボクも見てみたいなの」

「見んでいい」

私は、日鞠に視線を向ける。

日鞠が人の家に来るときは、大抵ろくなことがない。

「日鞠、何の用なんだ？」

「実は、龍然と呼ばれる強力な妖怪が出現したのですよ」

「龍然」

流石に、その妖怪は知っている。

かなり強力な、龍の姿をした妖怪だ。

龍然は、自然を操る強力な妖怪……それなりに強い道士が集まっても倒すことができなかったと言われている、道士達に教えられて

る対処法は龍然を見たら、逃げろ。

つまり、まず勝てない相手であると言うことだ。

「龍然は、とある村の近くで暴れていて、このままでは…その村にまで被害が及ぶのです」

日鞠は、いつもと違う暗い面持ちで言う。

「じゃあ…用って言うのは…」

「はい。龍然と一緒に倒しに行ってほしいのです。あの方に言われました。道士で、トップクラスの力を持つ者を集められるだけ、集めろと」

「分かった…」

私は、頷いた。

私は道士の力を失っているから、闇鴉を連れて行く必要がある。

「大変そうだね」

闇鴉は、いつも通り、にこにこした表情だった。

「龍然さんは、怒りっぽいからね…そろそろ潮時かなー…」

「潮時…?」

「うん、ずっと退治されないと思ってたんだよね。あんまり暴れてなかったし。暴れるのは、強い妖怪の性なんだろうね」

私は、難しい表情をした。

「それは…お前もか?」

「うん、まあね。ほら、千羅ちゃんの手助け——」

「待て、黙れ」

私は、慌てて闇鴉の口を開いた。

日鞠は、私が道士としての力を失ったことも、闇鴉に頼っていることも知らない。

万が一のため、ばらすわけにはいかない。

「どうしたのですか？」

日鞠は、不思議そうに首を傾げていた。

「いや、何でもない。ほ、ほら、行くなら早く行こうじゃないか」
「そうなのです。急がなければ大変なことになってしまうのですよ？」

「ああ」



外へ出ると、綺麗に空が晴れ渡っている。

雲一つない青空で、太陽の光が明るく地上を照らしている。

その日鞠の言う村は、案外近く、森を抜けた先にあるらしい。

「千羅がいれば、心配ないですよ」

日鞠が嬉しそうに笑顔で言う。

「あ…ああ……」

「千羅は、天才なのですから」
「……」

そう言ってもらうと、何と言うか、道士の力を失っていることを隠しているのに罪悪感を感じる。

どうするべきか。

私はため息をついた。

闇鴉は、相変わらずニコニコしながらふわふわ宙に浮きながら、当然の如く足音など立てずについて来ている。

見事に背後にくっついてついて来るので、まるで悪霊にでもとり憑かれたみたいだ。

あまり、いい気分はしない。

「なあ、日鞠……他の奴にも声をかけたんだろう？」

「はい」

「誰に声を掛けたんだ？一応、名前を——」

名前、と言う言葉に闇鴉が反応したようだった。
特に気にしなかったが。

「リオとまいつなのですよ？」

「ま、まいつか…私、アレを見ると目まいと頭痛が止まらないんだが……」

「頑張るのですよ」

日鞠は、励ますように私の肩をポンと叩いた。

そう言われてもなあ……まともに、妖怪退治できるだろうか……さらに、あんな強い妖怪を……無理かもしれないな。

そう思いながら、木々が多すぎるぐらい生い茂る暗い森のなかを歩き続けた。

「名前、ね……」

闇鴉は、珍しく難しい表情だった。

何を呟いていたのかは、聞こえなかった。

テガンという村に到着すると、リオとまいつ……ではなく、リオと古我が待ち伏せしていた。

長い金髪にカチューシャをつけているのが、エクソシストのリオで、黄緑の髪で

ちよつと変わったデザインの服を着込んでいるのは、勇者の古我だ。

この二人は、つつこみどころがありすぎて、つつこむ気が失せる。なぜ、エクソシストや勇者が妖怪退治を倒すのかというところから、延々と続くことになる。

「遅かったじゃない」

リオが聖剣の手入れをしながら、こちらに目を向けた。

「ちよつと、迷ってな」

「そうなの？」

「迷子とは……お前ら何歳だ」

「黙れ古我」

「……」

古我が、闇鴉に目を向ける。

「何だ、それは」

「闇鴉だ」

私は、冷静に答えた。

「友達とやらか」

「そんなところだ。ある程度戦力になるからな」

「ふむ」

古我は、無表情のまま闇鴉を観察していた。

闇鴉は、相変わらずニコニコしているだけだった。

「ところで、まいつはどうした？ 日鞠、誘ったんじゃないのか？」

「それなら、さっき連絡があって、来れなくなったらしいのですよ」

日鞠は、着物には似合わないケータイ電話をみせびらかしながら笑顔で言った。

私は、ほっとして胸を撫で下ろす。

来ないなら、まともに戦えるだろう。

「ねーねー、まだ行かないの？」

能天気闇鴉は質問してくる。

「そうだな。早く行こう」

「そうね」

龍然——実物は、見たことがない。一体、どんな姿をしているんだろう……
龍の姿をしているとは、知っているが実物は見たことがない。



木々も枯れはて、何もないハゲ山を登った。
遮るものがなく、太陽の光が直接当たり、暑かった。
その代わり、普通の山とは違って足場は悪くないから、スムーズに登ることができた。

「ここ、久しぶりだな」

闇鴉が懐かしそうに呟く。

「来たことあるのか？」

「うん、何度かね」

「ふーん……」

特には気にせず、登り続けた。
闇鴉は、相変わらずニコニコしながらついて来る。



ようやく頂上に到着した。

「ここに、現れるはずよ」

リオが真剣な表情で呟く。

高いところだ……空がとても、近く感じる。

その時、目の前に龍の形が見えた。

幽霊のように、透けていたのだが、しだいにはっきりと姿を現した。

巨大な龍が――。

「我を殺しに来たか、人間……」

これが、龍然か。

龍然が天を仰ぐと大きな風が巻き起こる。

「かかって来い。返り討ちにしてくれる」

龍然は、大きな咆哮を上げる。

「言われずとも……」

懷から、銃を取り出し、龍然目掛けて引き金を引いた。
龍然の身体は頑丈らしく、銃を弾く。

「どうするか」

そう呟いている間に、リオが聖剣を龍然に向ける。
そして、十字をきる。

「神よ、この悪しきものに罰を与えるため、力をお貸しください……」

聖剣が、白い光に包まれる。

「聖風!!」

聖剣から、白く輝く風が巻き起こり、龍然の身体を切り裂く。

「甘い……人間どもが。この程度で我は倒せん」

龍然は、雨を降らせた。空から、雨が大量に降ってくる。雷が鳴る。

これが、龍然の力……自然を操る妖怪――。

「雷よ――打て」

龍然が低い声で呟く。

「まずいっ……日鞠、防御結界を」

「無理なのですよー……」

「は……?」

こんな時に、こいつ、何を。

「太陽が見えないのです……」

暗い面持ちで呟く日鞠の言葉に、はっとした。

そうだった……日鞠は、太陽の道士だった。

太陽の見えないところで、力を発揮することはできない。

雷が、山に落ちる。

「……っ！」

何とか避けて、体勢を立て直した。
そして、呪文を唱える。

「母なる大地、我に力を、悪しき妖を断罪する」
銃の引き金を引くと、赤い光が龍然の身体を貫く。
「はっ！」

それに続いて、リオが聖剣で龍然を斬りつける。

「ぐっ……やるな、人間………」

龍然がよろめく。

「千羅、早くトドメを刺しなさい！」

リオに促され、銃を龍然に向ける。
これで、撃って、後は……闇鴉にトドメを刺してもらえば、終わりだ。

「早く殺せ……」

龍然は、大人しくしていた。
ふと、脳裏に疑問が浮かぶ。
こいつ、本当に退治しなければならぬほど悪い妖怪なのか……
……？

「お前——本当に、悪い妖怪なのか？」

龍然に、問いかけてみた。

「だから、甘いと言うのだ」

その瞬間、龍然の目が鋭く光った。

しまった、と思った時には遅かった。龍然の長い胴体が身体に巻きついた。

「くっ……!？」

まずい……絞め殺される……。

「千羅! ちょっと、古我! 見てないで助けなさいよ!」

リオが慌てて助けを求めても、古我は無表情で観察しているだけだ。

「ここで死ぬなら、それまでだったと言うことだ」

そう言えば、アイツはああいう奴だった。

人を助けることはない。

しかし、まずい……意識が遠くなってくる。

「こ、の……」

龍然の顔を見た時だ。

違和感を感じる——

こいつが、暴れているのは、こいつの意思なのか——?

龍然の胴体が切り裂かれ、私はぽとりとポイ捨てされたみたいに落ちた。

龍然の目の前には、闇鴉がいた。

「龍然さん、久しぶりだね」

闇鴉は、懐かしそうな表情で龍然に話しかけた。

「夜月——お前は、随分変わった……………」

夜月…………？ 何の名前だ？

「うん、そうだねー」

私の疑問など、関係なく闇鴉と龍然の話は続く。

「お前も私の敵となったか」

「そうだね。残念ながら……………」

闇鴉は、苦笑いする。

まだ、雨は降り止まない。しとしと地面を濡らしていく。

「夜月」

龍然は、低い声で呟く。

「うん、ありがとう。名前を呼んでくれて」

「私は…………そろそろ潮時のようだ」

二人の会話を黙って聞いた。邪魔はしない……………してはいけない気

がした。

なぜかは、分からないが……この雨は、龍然の感情を表している気がしてならなかった。

龍然の胴体からは、大量の血が流れている。

先程、闇鴉が切り裂いたからだ。

血は、雨に混じって流れていく。

あの状態なら、いくら強い妖怪と言えど、もう長くはない。

ただ、どうしても疑問が消えない……本当に、龍然は悪い、退治されなければならないような妖怪なのか？

違う気がした。

その反面、違う気がするのにそれでも、龍然を退治しなければならぬ気がした。

私は、難しい表情をした。

この、違和感は、一体何だ——？

分からない、なぜ？

そう考えている間にも、闇鴉と龍然の会話は続いている。

「夜月」

私は、夜月と言うのは、闇鴉の名前だと悟った。

龍然は、静かに告げる。

「我を——殺せ」

「本当に？ 龍然さんは、それでいいの？ 悪い妖怪じゃないのに」

闇鴉は、怪訝そうに尋ねた。

「ああ……私は、今は落ち着いているが戻れない。じきに暴れだす。そうなれば、言葉も通じん」

「何があったの？」

「明確には、言えん。呪いによってな」

「呪い？」

「金と銀の札を持った——道士に気をつけよ」

道士、だと？

道士が何かやらかしたのか？

「我に言えるのは、これだけだ。さあ、早く殺せ」

「そっか。困ったなあ……でも、こうするしかないんだよね……僕はね、龍然さんのこと、親だと思ってたんだよ……。生まれればかりの僕に、名前をつけてくれて世話をしてくれて、いろいろ教えてくれて、たまに遊んでくれて。だから、悲しいなあ……」

闇鴉は、悲しそうにつぶやく。

「もう、他に道はない。夜月、我を殺せ」

「そっか。それで、本当にいいんだね？」

「ああ……」

「じゃあ、仕方ないか」

龍然は、天を仰ぐ。

「ああ……今日も——空が綺麗だ」

闇鴉は、闇の風を巻き起こし、龍然の全てを切り裂いた——。

「さようなら、龍然さん」

龍然は、光の粒子と化して、空に溶け込むように消えた――



リオや古我、日鞠と別れ、また森のなかを歩いていた。
闇鴉は、後ろからふわふわ浮きながらついて来る。
もう夜で、生い茂る木々の間から綺麗な月が見える。
空を見上げた時だった。

「ちょうど、こんな夜だったな……僕が生まれたのは」
ようやく闇鴉が口を開いた。

「……」

何と答えていいのかわからない。

「夜月——この名前ね、呼んでくれるの龍然さんだけだったんだよ。でも、もう呼んでくれる相手がなくなっちゃったね」

闇鴉は、苦笑いした。

「……名前ぐらいなら、頼まれば呼んでやらないこともないが……」

何だこの態度？

自分でもひどいと思った。もっとマシな態度が取れないのか？

「そうなんだ？じゃあ、頼もうかな。名前って、呼ばれないと忘れちやいそうで怖いんだよね」

闇鴉は、先程とは打って変わっていつものように笑った。

「千羅ちゃんって優しいね」

「べつに……そんなことはない」

そして、私は黙り込む。

「どうしたの？」

「……えーと、あれだ……あれ。お前の名前なんだった？忘れた」
「君ねえ……」

第八夜（後書き）

一応これで完結します。

以前の書いたものの修正版といっても多々ミスなんかありますが。

第一部の完結なので、終わり方がおかしいです。

第二部以降は書くか未定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6543x/>

元天才道士が妖怪ハーレムを完成させた！？

2011年10月29日08時09分発行